# 「療育一代」の言葉は、残念ながら今も生きている

障害者支援施設で宿泊実習等をしたメル友から、次のような実習感想が届いた。

【　私にとって意外だったのは、スタッフの皆さんが働いている職場以外に　自身で係わっている場や、同業で施設外の繋がりを持っているという方が少ない事でした。

また、実習生が入ってくる事が日常となっているので、外部から見られているという意識が少ないというか、自分達の職場の魅力や係わり合いの素敵な部分を伝えて、今後の支援者や新しい出会いに繋げていきたいという想いを語って下さる方が少なかったのが残念でした。

その点は、管理職の方は強く感じて努力しておられるのに、現場に想いが伝わっていないところに、想いが階層化しているのかなと思いました。　】

次のように返信した。

【　福祉とは、社会の一人一人の意識改革というところまで、日頃意識していないと、つい施設内の枠内で留まりがち。

階層化は、どこの施設でもありがちなことです。

かように福祉というものは、建物を造ったり制度を作るだけでなく、究極的には一人一人の意識（精神）から構築、継承されるべきものだけに、なかなか先輩、管理職の思いは伝わりにくい側面をもっています。

参考までに、昔も今も「療育一代」という言葉が生きています。つまり、施設等の創成期の人の療育理念等は、次の代に受け継がれて行きにくいというところから産まれた言葉のようです。

学生時代に師と仰ぐ院長と出会いその理念に共鳴し、就職までお世話になりましたが、師が辞められた後、施設の雰囲気が師の理念を継承できないことに焦り、苦悩し、師に報告、相談したこともありました。

その折り、「もういいから…」と師に慰められたことがあります。

正に、「療育一代」の具体例を身をもって体験しています。

でも考えようで、人の意識を相手にしているだけに、一人一人に向かって語り続けていれば、いつか理解し意識は変わり得る、伝え得ることも可能でないかと思い、師の生きよう（様）から学んだことを HP 等でも発信し続けているつもりでいます。

やはり諦めることなく、語り、伝え続けることが、何よりも必要なことのように思います。　】

（2006 年 8 月 25 日　記）